灰色の月

東京駅の屋根のなくなった歩廊に立っていると、風はなかったが、冷え冷えとし、着てきた一重外套でちょうどよかった。

連れの二人は先に来たうえのまわりにのり、あとは一人、品川まわりを待った。

薄曇りのした空から灰色の月が日本橋の焼跡をぼんやり照らしていた。

月は十日ぐらいか、低い、それになぜか近く見えた。八時半ごろだが、人が少なく、広い歩廊が一層広く感じられた。

遠く電車の頭燈が見え、しばらくすると不意に近ついて来た。

車内はそれほど込んでいず、私は反対側の入口近くに腰かけることができた。右に五十近いもんぺ姿の女がいた。

左には少年工と思われる十七八歳の子供が私の方を背し、座席の端の袖板がないので、入口の方へ真横を向いて腰掛けていた。

その子供の顔は入って来た時、ちょっと見たが、眼をつぶり、口はだらしなく開けたまま、上体を前後に大きく揺すっていた。

それは揺すっているのではなく、身体が前に倒れる。居眠りにしては連続的なのが不気味に感じられた。

私(わたし)は不自然(ふしぜん)でない程度(ていど)に子供(こども)との間(あいだ)を空けて腰かけていた。

有楽町(ゆうらくちょう)、新橋(しんばし)では大分(だいぶ)込(こ)んできた。買出(かいだ)しの帰(かえ)りらしい人(ひと)も何人(なんにん)かいた。

二十五(にじゅうご)の血色(けっしょく)のいい丸顔(まるがお)の若者(わかもの)が背負(せお)ってきた物別(ものべつ)おおきなリュックサック(りゅっくさっく)を少年工(しょうねんく)の横(よこ)に置(お)き，腰掛(こしかけ)に着(つ)けて、それに跨(また)ぐようにして立(た)っていた。

その背後(はいご)から、これもリュックサック(りゅっくさっく)を背負(せお)った四十(よんじゅう)ぐらいの男(おとこ)が人(ひと)に押(お)されながら、前(まえ)の若者(わかもの)を覗(のぞ)くようにして、

「載(の)せてもかまいませんか」と云(い)い、返事(へんじ)を待(ま)たず、背中(せなか)の荷(に)を下(お)ろしにかかった。

「待(ま)って下(くだ)さい。載(の)せられると困(こま)るものがあるんです」若者(わかもの)は自分(じぶん)の荷(に)を庇(かば)うようにして男(おとこ)の方(ほう)振返(ふりかえ)った。

「そうですか。済(す)みませんでした」男(おとこ)はちょうっと網棚(あみだな)を見上(みあ)げたが、載(の)せられそうもないので、狭(せま)いところで身体(しんたい)を捻(ひね)り、それをまた背負(せお)ってしまった。

若者(わかもの)は気(き)の毒(どく)に思(おも)ったらしく、私(わたし)と少年工戸(しょうねんくと)の間(あいだ)に荷(に)を半分(はんぶん)かけて置(お)こうと云(い)ったが、

「いいんですよ。そんなに重(おも)くないんですよ。邪魔になるからね。おろそうかと思ったが、いいんですよ」そう云(い)って男(おとこ)は頭(あたま)を下(さ)げた。見(み)ていて、私(わたし)は気持(きもち)よく思(おも)った。

一トころとは人の気持も大分変わってきたと思った。

浜松町、それから品川に来て、降りる人もあったが、乗る人の方が多かった。少年工はその中でも依然身体を大きく揺すっていた。

「まあ、なんて面をしてやがるんだ」という声がした。それを云ったのは会社員というような四五人の一人だった。

連れの皆も一緒に笑いだした。

私からは少年工の顔は見えなかったが、
会社員の云いかたが可笑しかったし、
少年工の顔も恐らく可笑しかったのだろう、車内にはちょっと快活な空気ができた。

その時、丸顔の若者はうしろの男を顧み、
指先で自分の胃の所を叩きながら、
「一歩手前ですよ」と小声で云った。
　男はちょっと驚いた風で、黙って
少年工を見ていたが、
「そうですか」と云った。
　笑った仲間も少し変に思ったらしく、
「病気かな」
「酔ってるんじゃないのか」
こんなことを云っていたが、一人が、
「そうじゃないらしいよ」と云い、それで

皆にも通じたらしく、急に黙ってしまった。

地の悪い工員服の肩は破れ、裏から手拭で継ぎが当ててある。後前に被った戦闘帽の廂の下のよごれた細い首筋が寂しかった。

少年工は身体を揺すらなくなった。そして、窓と入り口の間にある一尺ほどの板張にしきりに頬を擦りつけていた。

その様子がいかにも子供らしく、ぼんやりした頭で板張を誰かに仮想し、甘えているのだという風に思われた。

「オイ」前に立っていた大きな男が少年工の肩に手をかけ、「どこまで行くん

だ」と訊いた。少年工は返事をしなかったが、また同じことを云われ、
「上野へ行くんだ」と物憂そうに答えた。
「そりゃあいけねえ。あべこべに乗っちゃったよ。こりゃあ、渋谷の方へ行く電車だ」

少年工は身体を起こし、窓外を見ようとした時、重心を失い、いきなり、私に倚りかかってきた。

それは不意だったが、後でどうしてそんなことをしたか、不思議に思うのだが、その時はほとんど反射的に倚りかかってきた少年工の身体を肩で突返した。

これは私の気持ちをまったく裏切った動作で、自分でも驚いたが、その倚りか

かられた時の少年の身体の抵抗があまりに少なかったことで一層気の毒な想いをした。

私の体重は今、十三貫二三百匁に減っているが、少年工のそれはそれよりもはるかに軽かった。

「東京駅でいたから、乗越して来たんだ。どこから乗ったんだ。」私はうしろから訊いてみた。

少年工はむこうを向いたまま、

「渋谷から乗った」と云った。誰か、

「渋谷からじゃ一トまわりしちゃったよ」と云う者があった。

少年工は硝子に額をつけ、窓外を見ようとしたが、すぐやめて、ようやく聴きと

れる低(ひく)い声(こえ)で、
「どうでも、かまわねえや」と云った。

少年工(しょうねんく)のこの独語(どくご)は後(あと)まで私(わたし)の心(こころ)に残(のこ)った。

近(ちか)くの乗客達(じょうきゃくたち)も、もう少年工(しょうねんく)のことには触(ふ)れなかった。どうすることもできないと思うのだろう。

私もその一人で、どうすることもできない気持ちだった。

弁当(べんとう)でも持(も)っていれば自身(じしん)の気休(きやす)めにやることもできるが、金(きん)をやったところで、昼間(ひるま)でも駄目(だめ)かも知(し)れず、まして夜九時(よるきゅうじ)では食(く)い物(もの)など得(え)るあてはなかった。暗澹(あんたん)たる気持(きも)ちのまま渋谷駅(しぶやえき)で電車(でんしゃ)を降(お)りた。

昭和二十年十月十六日(しょうわにじゅうねんじゅうがつじゅうろくにち)のことである。